

堀耕治先生の定年ご退職にあたって

大石 幸二

2019年3月末をもって文学部心理学科の時代より立教心理の発展に尽力してこられた堀耕治先生がご退職となる。2000年に立教大学文学部心理学科・助教授に就任されて以来19年の長きにわたり心理学科長、執行部会座長、心理学専攻主任、主任会座長、現代心理学部長、現代心理学研究科委員長など数多くの要職を歴任された。

堀先生は大阪府のご出身だが、大学進学の際に東京に出て来られたと伺った。そして1977年に慶應義塾大学文学部社会心理教育学科をご卒業された後、1979年に同大学院社会学研究科心理学専攻・修士課程および1982年に同博士課程を修了された。その後、1989年に埼玉医科大学医学部・第1生理学講座に助手として迎えられ、1996年からは同講座の専任講師に昇任された。そして先述のとおり、2000年に立教大学に着任された。

動物実験に基盤を置く学習心理学、行動分析学(実験的行動分析)に加え、行動薬理学、神経生理学、脳神経科学などの広範な教育研究活動に従事された。この間、2度にわたる在外研究を経験され、メリーランド大学ボルチモア郡校にてチャールズ・カタニア教授と共同研究を行われている。

そもそも私をはじめ堀先生をお見かけしたのは、1997年の日本行動分析学会第15回年次大会(慶應義塾大学)であった。当時埼玉医科大学におられた堀先生は「単一被験体法を学ぶ—行動科学における古くて新しい方法論—」と題するワークショップにおいて丁寧に私たち聴衆にご指導くださった。医学部の基礎研究に日夜従事している研究者がこれほど平易な言葉でご指導くださるのか、と大学院生だった私は感銘を受けた。

それから時を隔てて、ある日堀先生から思いが

けずお手紙を戴いた。立教の新学部開設にともなう教員募集のご案内であった。私のほうは堀先生を存じ上げていたが、堀先生は私のような馬の骨を知っているはずはなく、夢のようなことだと感じた。2004年の極月だったと思う。そのときに頂戴した手紙は、私の宝物の1つとして今も私の手元にある。

いろいろと私が知る堀先生を記したが、私は堀先生と宴席で顔を合わせるのが好きである。堀先生の若かりし頃の話をお伺いするからである。誠実なお人柄の堀先生は、研究上の話はもちろんのこと、とるに足らない昔話でさえ率直にありのままを教えてくださいました。私はそれを聴くのが好きだった。

先例に倣い、学外者も聴講できる「最終講義」と「退職記念パーティー」を企画しようと、かつての心理学科助手であった白井さんと画策していた。が、遠慮深く独自のお考えをお持ちの堀先生ご本人から固辞されてしまった。このことが心残りである。仕方がないので、いずれかの機会をみて“超内輪”のお祝いの会でも企画しようかしら、と私は自身の企みをまだ諦めていない。この原稿を書きながら、そのうち……と決意を新たにした。

立教大学はご退職される堀先生だが、これからも学界の重鎮として、私たち後進の者の歩む道が間違わないように、引き続きお導きいただきたい。春には、堀先生と一緒に執筆をさせていただいた『行動分析学事典』が発刊となる。

どうぞこれからもお元気で。